
白玉楼の家族模様 改訂版

L iger

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白玉楼の家族模様 改訂版

【Nコード】

N6843Y

【作者名】

L i g e r

【あらすじ】

冥界の姫、西行寺幽々子の気紛れで拾われた人間の子供がいた。その少女が成長しながら、妖怪と人間の寿命の差に煩悶するお話。……に、したい。

これは以前投稿した同タイトル作品の改訂版です。設定が変わっている部分があります。

ブログ（前書き）

改訂版を新しく投稿しました。以前のお気に入り登録をされている方はこっちに変えてくださると有り難いです。現在は非公開ですが、いずれフェードアウトする予定なので。

また、タグにもありますが週一更新の予定です。暫くは加筆修正をした以前のお話しかありませんが、ご了承下さい。

プロローグ

「あら？　これは……」

月が煌めくある夜。

一人の女性が何かを見つけ足を止める。

「捨てられたのかしら？　外界か里かは分からないけど……」

女性は毛布にくるまれたモノ——人間の赤子を見つめる。

そして少し考えた後、柔らかに微笑んでその赤子を抱きあげた。
その際に確認してみると、この赤子は女の子だった。

「まあ、妖夢も怒らないでしょう。非常事態だし……」

そう呟いて眠っている赤子の頭を撫でる。

赤子が起きる様子は一切ない。また、体温も低いことから長いこと放置されていたと分かる状態だった。

「さ、行きましようか。これから貴女の家にもなる場所へ」

これはある亡霊——西行寺幽々子の気紛れで捨てられた人間の子供の話である。

「ただいま。妖夢、ちょっと来てくれる？」

「幽々子様、お帰りなさいませ……って、それは何ですか!？」

妖夢は私に抱かれて眠っている赤子を見て奇声をあげた。予想通りね、もうちょっと予想外なりアクションを取れないものかしら。

「うるさいわ。この子が起きちゃうじゃない」

「も、申し訳ありません……。っそうじゃなくて! どうしたんですか、この子!」

まさか隠し子!? なんて言っている妖夢に溜め息がでてしまう。ああほら、ぐずつちゃったじゃない。

「……落ち着きなさい。この子は拾ったのよ、散歩の途中に」

「ひ、拾った? ……捨てられてたんですか?」

「そうね。そんなわけでこの子育てるから」

「ええ!? ど、どうしてですか! 里に預けた方が……」

「その里に捨てられた子だったらどうするのよ」

「う……。そ、それは……」

「外の世界で捨てられたのなら紫にも報告したほうがいいでしょうし、ここで育てる方が手間が省けるじゃない」

言葉に詰まったのを見て更にたたみかける。まだまだこう言った話術では弱いわねえ、妖夢は。

「し、しかし此処は冥界で、生者が住む場所では……」

「別にいいじゃない。此処の主は私よ? 決定権は私にあるわ」

閻魔にはとやかく言われそうだけど。まあ、それはその時考えればいいわ。

そんな事を考えながら妖夢を見る。すると私の決意を感じ取ったのか、深くため息をついて口を開いた。

「……分かりました。この子を育てましょう」

「あら、物分かりがいいじゃない」

「こうなると、幽々子様は折れないじゃないですか」

言いながら、妖夢は先刻の自分の大声でぐずりっぱなしの赤子をあやし始めた。なんだ、意外と気に入っているじゃない。

「良く分かってるわね。さて、それじゃあ名前でも決めましょうか」
「決めてなかったんですか？」

妖夢は私を何だと思っているのかしら。私だってついさっき見つけた子供に名前つけられる余裕なんてないわよ。

そんな関係のないことを頭から振り払い、名前を考える作業に戻る。難しいのよね、こういうのって。名は体を現すというし、変な名前にはできないもの。

「うーん……」

隣で妖夢も頭を捻っている。中々思い浮かばず、何か案はないかと周囲を見る。——あら、これは。

「？ 幽々子様？」

庭にある、たくさんの桜の木が目にとまった。昼に見るのとは違い、また美しい夜の桜。

それを眺めていると、ふと、頭にこんな名前が浮かんできた。

「――美桜^{みお}、なんてどうかしら」

「美桜……ですか。いいですね、それにしましょう」

同意を得、妖夢から赤子を受け取る。いつの間にか目を覚ましていたようで、私のことを見つめてくる小さな人間の子供。恐怖も憎悪も、そして幸福も知らない純粹な魂。その頭を一撫でし、こう告げた。

「貴女の名前は西行寺 美桜。これからよろしくね、私の娘」

一氣に妖々夢（前書き）

プロローグだけでは流石に寂しいので投稿。

一気に妖々夢

西行妖——それは咲かない桜の木。

その昔、ある歌人がその木の下で息を引き取った。しかしその後、その歌人を追う人が絶えなくなり、桜の木はその人々の精気を吸収した結果、妖になってしまったのだと言う。

そしてその木には『何者か』が眠っている、らしい。復活させるには西行妖を咲かせなければならず、そのためには『春』を集める必要がある。

故に私の母——西行寺 幽々子その人は、幻想郷中の春を集めている。

しかしそのために、顕世では五月になっても冬が明けないらしい。私からすれば、白玉楼は桜が咲いているため実感は全くない。

だが、当然被害のある顕世では大問題。遂に博霊の巫女が調査と解決に向けて動き出したらしい。……正直、四月くらいで動いても良かったのではと思ったりしている。

とにかく、今はその博霊の巫女とその仲間らしき人たちが此処に向かっているようだ。因みに私は、この所謂『異変』にはノータッチ。

ただ忙しそうに動いている母と、姉同然の半人半霊——魂魄妖夢を見ていることしかできない。

今もそうだ。西行妖を見ている母を、縁側から見つめている。

「どうしたの、美桜？」

「……何でもないよ。ただお母さんを見てただけ」

「あら、どうして？」

「ん……なんとなく、無理してそうだなあって」

「そんなことないわよ。それは妖夢」

「私からしたらどっちも、だよ」

確かに春度を表立って集めているのは妖夢お姉ちゃんだ。けど、お母さんもいろいろやっている。西行妖を咲かせて封印を解き、『何者か』を復活させるための準備とか。

「心配してくれてるの？」

「そりゃあね。大事な家族を傷つける可能性があるんだよ？ 気が気じゃないよ」

「ふふ、ありがとう。でも大丈夫よ」

お母さんはゆっくりと私に近づいて、隣に座ってきた。しかし視線は西行妖のまま。それに倣うように、私も咲かない桜の木に目を向ける。

「いざとなったら私の能力を使えばいいもの」

桜から視線を外し、今度は私に視線を向けてくる気配がする。しかし私は桜……正確に言うとその根本から視線を外さない。——否、外せない。

「たとえ何が復活しようとも美桜は絶対に傷つけさせないから、安心なさい」

「……そういうことじゃないんだけどなあ。それに——」

「？ なあに？」

「……何でもない。それより、博麗の巫女さんたちと妖夢お姉ちゃんが戦い始めたみたいだよ」

「そう。勝てるかしらね」

「無理だと思う。向こうは三人みたいだから、一人の相手をしてたら二人がこっちに来ちゃう。というか来てる」

「あらあら。美桜、あなたは下がっていなさいよ？ 怪我なんてしたら大変なもの」

「分かってる。お母さんと戦わない人とお話でもしながら待ってるよ」

苦笑しながら指示に従う。まったく、過保護だなあ。

——それにしても、やっと来てくれたんだ。博麗の巫女だけかと思っていたら三人も。これは嬉しい誤算だと思いながら、言い損なったことを心の中で反芻させる。

『それに——、お母さんが西行妖を咲かせられるとは限らないよ？』

お母さんが立ちあがり、私が少し離れた場所に座ったところで再度その人たち——博麗の巫女とメイドさんは来た。魔法使いさんは妖夢お姉ちゃんと戦っている。

「何か御用かしら。お二方」

「あんたがこの異変の首謀者でしょ？ 花見が出来なくて困ってるのよ」

「だから、私たちが黒幕を懲らしめに来たってわけ」

「それは悪いわね。でも、もう少して西行妖が咲く。そうしたらき

ちゃんと返すわよ」

「西行妖い？ 何よそれ」

「うちの妖怪桜。何者かが封印されているみたいなの」

「封印されてるものを解くなんてしないほうがいいんじゃないかしら」

「……結界壊した人たちの言うことでもないと思うけどなあ」

今まで空気だった私が口を開いたことで場の視線が一気に集中する。

何か本当にごめんなさい。雰囲気壊すつもりはなかったんです。

「……何、誰？」

「私の娘。可愛いでしょ。どこぞの巫女と違って暴力的に物事を解決しない自慢の子よ」

「人間？」

「ええ、そうよ」

冥界に人間がいるということが腑に落ちないのか、巫女さんは目を細めて私を見る。その視線に微笑みで返すと、訝しんだ視線を向けてくる。だがそれは一瞬で、気づくと再びお母さんに視線を戻していた。

「……まあいいわ。じゃあ二対二？」

「いいえ、あの子は戦わないわ」

「あつそ。じゃあ私が相手に——」

「そもそもね、戦いなんかに参加して怪我したらどうするの？ 軽い傷ならまだしも一生ものの傷跡が出来たりした日には、私は目につくものを全部壊しちゃうかもしれないわ。そして犯人は死んだほうがマシだと思えるくらいに精神的に追い詰めて、でも自我を失わせないようにして、永遠に私の手で苦しめる。『いつそ殺してくれ』」

って懇願せざるを得ないくらいにキツイのをね。というかね、新しく出来た弾幕ごつこと言えど、可能性は低いけど死ぬかもしれないのよ？ そんな危険なものにどうして大事な娘を――」

「お母さあん！ もうやめて!？」

巫女さんとメイドさんの目が可哀そうなものを見るソレになるから！

「……………もう分かったわよ。私がやるから咲夜、あんたは見学しなさい」

「……………ええ。春が戻るなら私が出張る必要もないし」

そう言つてメイドさんは私の近くに腰を下ろした。

……あの、この微妙な距離は初対面故のものですよね？ 決してお母さんの言葉に引いたとかそんなのではないんですよね？

若干私たち親子の評価が気になるが、それよりも今は巫女とお母さんの戦いが優先だ。評価は後で掘り葉掘り訊こう。

少ししか見ていないが、あの巫女さんは強いと分かる。ああ、良かった。これで――

「――西行妖を咲かせずに済む」

「……………え？」

「いえ、何でもありません。こちらの話です」

訝しげな視線を向けてくるメイドさんをスルーしつつ、戦いを見る。守る。

純粹な殺し合いならとにかく、これは弾幕と呼ばれる決闘法。あのお母さんを倒せる可能性があるのはこれだけだろう。

——実を言えば、博麗の巫女がお母さんを倒せず春を奪われたら、私が西行妖を咲かせるのを阻止しようとしていた。お母さんの言う、『何者か』を復活させなくなかったから。あくまで推測でしかないが、その何者かの見当が私にはついていない。

お母さんが読んだ古い書物などを私も読み、自分なりに考察した結果だ。幼少期からの紫様たちの英才教育のおかげで、それなりに知識はある。

私の推測が正しいとすると、あの桜の下に眠るは母の亡き骸。亡霊の唯一と言っているいい弱点。則ちそれは、最終的に母の消滅を意味している。

それが分かっているにも実行しなかったのは恐かったから。自分を庇護し、育ててくれた大恩ある人に歯向かいなくなかったから。

……でも結局、これらは私の勝手な理由。私情を挟んで、一番最悪な状況を招きそうになってしまった。巫女さんのおかげでそれは回避できそうだけど、そんなのは結果論でしかない。本来なら、娘たる私が、事実を知った私が行うべきことだった。

「……弱いなあ、私は」

この呟きは、メイドさんにも聞こえずに霧散していった。

一気に妖々夢へ決着

だんだんと激しくなっていく戦闘。それに伴って美しい弾幕が空を覆う。

今は巫女さんがやや優勢といったところだろうか。それでいい、封印を解くなんてことはしたくない。お母さんも興味本位でやっていることだから、負ければ素直に春を集めるのをやめてくれるだろう。

「冷静ね」

「え？」

「母親なんですよ？ 心配しないの？」

「弾幕“ごっこ”ですから。遊びでそこまで心配はしませんよ」

「そう」

「それより、貴女方のお仲間である魔法使いと戦っている妖夢お姉ちゃんのほうが心配です。確か……そうだ、魔理沙さん。そんなお名前でしたよね、咲夜さん？」

刹那、隣にいたはずのメイドさんが私の背後にいた。その手にはナイフが握られ、ついでに言うそれは私の首元にある。

「……初対面である私たちの名前を知っているのは何故かしら？」

「やめておいたほうがいいですって。今は平気ですけど、お母さんがこれに気付いたら殺されちゃいますよ？」

あの人は私のことになると思保護だからね。未だに一人で遠出させてくれないし。もうここまで来ると、当事者なのに笑うしかないよ。

「質問に答えなさい」

「怖いなあ。少し落ち着いてください」

強く宛てがわれるナイフに気付き、その手を掴む。そして半ば強引にその腕を遠ざけた。

「っ……何を、したのかしら？」

「何って、ただ引つ張っただけですよ。あ、も、もしかして痛かったですか？ すみません、力加減がよく分からなくて……」

「別に痛くはないわ。そういう事じゃなくて、どうして私の動きをそう簡単に止めることが出来るのかってこと」

「？」

「だから、男性だったらまだ分かるのよ。悔しいけど女性との筋力差があるもの。でも、私と貴方は同性で年も近い。なのになぜ、私は貴女の拘束から抜け出せないのかしら？」

あ、そういう事。

「……もしかして、あなた男なの？」

「生まれて始めてそう言われました。私は女ですし、歳だってまだ十代ですよ」

そこまで中性的な顔だったっけ、私。

「まあ、まず名前のことですが、私が飛ばした式神を通じて知ったんです。戦闘などもそれを通じて」

「……式神？」

「はい。鳥型でその視点を私が見ることも、音を聞くこともできます。失礼ながらそれを使って皆さんの様子を」

紫様に教わった術の一つだ。無論、妖力ではなく靈力を使う仕様だし、藍様や橙に憑いているものと違い、呪符まじないふから召喚するタイプのもの。

「へえ。……で、この腕のことは？」

「単なる筋力差では？」

「どれだけ鍛えたらそんなのになるのよ。私だって一般人より強いと自負しているもの……もしかして能力？」

「いえ、別に私そんなの持ってませんよ。強いて挙げるなら、少し陰陽道を使えるくらいですか」

私はどこにでもいる一般人より靈力が高いくらいで、あとは何も取り柄はない。魔力なんて扱えないし、精々空を飛ぶのが関の山だ。

「あとはまあ、日々大妖怪と呼ばれる方々と訓練してますからね。どこを押さえれば力が入りにくいかとか、そういう武芸的な技術も大きいんじゃないでしょうか」

組手の相手は主に藍様で、妖夢お姉ちゃんとは剣道みたいなことをしている。二人にはかなり手加減をもらっているが、それでも妖怪に勝てるわけもない。

自分以外の人間と触れ合うこと無く今日まで来たから分からなかったが、成る程私の力は人間の一般女性よりかは強いらしい。今後人と接することがあったら気をつけようっと。

掴んでいた手を放し、お母さんたちの方向をもう一度見る。するとそこには、膝をついているお母さんの姿があった。

……しまった、戦闘見逃してた。お母さんの弾幕、綺麗だから見たかったのに。

「さあ、春を返してもらっわよ」
「……仕方ないわね」

その言葉とともに飛び散っていく春。これで幻想郷も元通りになるだろう。そう思うと、知らず知らずのうちに安堵のため息が漏れていた。

「なんだ、もう終わったのか」

「くっ、敵に情けをかけられるとは……」

「あ、妖夢お姉ちゃん！……大丈夫？」

「ん？ お前誰だ？」

「初めまして。この異変の首謀者の娘です」

「美桜！ 大丈夫だった？ 怪我してない！？」

……妖夢お姉ちゃんも過保護だよね。それとも私が頼りないのかなあ。

「私は平気だよ。それよりお姉ちゃんのほうが……」

「私に負けてボロボロだぜ」

「しかも肩まで借りてここに来てるわね」

「くっ……」

魔理沙さんと咲夜さんの言葉に苦々しげな顔になるお姉ちゃん。凶星つかれて情けない、っていう感じの表情をしている。

怪我はそんなに酷くはなさそうで、休めばすぐに回復する程度だ。ぱつと見、お母さんのほうもそんな感じ。やっぱり弾幕ごっこって、こういう血を流しすぎないところがいいよね。

「ふうん、亡霊の娘が人間か。さすが冥界、ここも常識に囚われて

ないぜ」

「そうかもしれないね。でも種族が違えど、私はお母さんが好きです。もちろん妖夢お姉ちゃんも。常識がどうか、そんなのはどうでもいいじゃないですか」

「み、美桜……！」

「うわっ、抱きつかないで妖夢お姉ちゃん！ 危ないよ！」

そう言いつつも、妖夢お姉ちゃんを抱きしめ返す。やっぱり安心するなあ……。

こうして最後はほのぼのとした空気になりながら、異変は終わりを告げたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6843y/>

白玉楼の家族模様 改訂版

2011年11月27日10時04分発行